



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



花園 奇譚 夢見草 卷之四

福東子玉 雄戲編

長崎町五丁目
大野屋總八

第八回

樂派の品はみゆのうりてとよみ一昔お
れをくひく成るまへ一昔のあはれよ
程ちよき人伴の驛と諸國よりもやこみつゝ乃
のこ首ゆく往來の旅客とて圓々數千の高
富軒とて金とあがへんとろとえ室よ

まひとせんじやくよ建一處店のひとせんじやくよあら
驛宿かうきやくせき告尾福右衛門がや屋一
ありてのうわがゆめやくひ保養のあらふと五
六人の人紙縫えのとくろみを贊めうけ乳
安ち今朝一も石山のくさんせんじんまうぐんとそ
ま出づとくらぬきみのうへとくのゆゑみ
せむれづとくらぬきみのうへとくのゆゑみ
居く男子婦人のうへとくら歌舞妓役者の

ひとせんじやくよとくらぬきみのうへとくのゆゑみ
ト女ふくはきとくはきとくはきとくはき
くくの子僧やくどくとくざくのかくとくざくの
ハクのとくとく「もんあがおれおもひのう
やくとくとくのがせんせんとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

言葉とがわくことあるよナレ

一ぐの事ことをかうへてかる

とも志しの由ゆ助すけとなのかた
やまよよのなのかでかのか由ゆ助すけをからかる

〔おもかげ〕

と
まえと思えりわ先せん生せいのひへあおと大だい端ばん
はの段だんの段だん。とこか筋すじのかく
ある爲めにうそうそをうそがえりゆ清きよ音おと
なる。ひへの間まの間まにまくらまくらの間まに
一ひともかかの書かへかととかかのかりと
わわび草くさののかかかかのかのかととと
ゆゆくく」
ととののかかととととよよ「ややははんんののかか」

五歳より六歳によ字を書ふも國の助と書ひ
うへり「山にかづくは山に立つてのち
と山に立つてそんうも山に立つてのち
うへり「山に立つてそんうも山に立つてのち
が母なる忠臣蔵のゆうの助によの助とや
てゆうの助と子ゆうの助とやまゆうの助と
うへり「山に立つてそんうも山に立つてのち
「山に立つてそんうも山に立つてのち

六月三日

おなじく山に立つてのち
うへり「山に立つてそんうも山に立つてのち
が母なる忠臣蔵のゆうの助によの助とや
てゆうの助と子ゆうの助とやまゆうの助と
うへり「山に立つてそんうも山に立つてのち
「山に立つてそんうも山に立つてのち

わせとおもてよきがとトアシガ利のと

ルアシガとおもてよきとあつと見

わく

うまうけの儲ひ乳母の石をすくは

と見

歌ようじうなむのうみのう

とほんのうなむのうみのう

うみのうみのうみのうみのうみのう

のえくしの徳がどもせぬまへぬ
のゆゑに恐れぬるよりひとと
がせひのきくわづかせば、ま
うぬゆきのお願とよびこまなぐく
い養育の情恩とあましゆ道理りど
るやうに年むすめよしの娘見もすくまを
うやうてふらすもくやの異見もすくまを
男子とはまぢくえ落へ親方にまじめがる

のハサウエリテアリカ一女大學今川氏
トシタマニシサハ師匠のちよかよややの
やうなつて、こまく名づけく野合といひう
だらまくつて、とてげはくるの
のまつねと鳥歎にてるとてきくあら成
るべくおやじかたまつての山教訓そのをと
が耳とある人ふこの事ハトあとひ
テムラムラバ乳母ハ道理にせんまく行と

ひくへんとどもかくゆううちおおきなぢやうあ
ひくのひのひく、育人一首を用文章の頭
書年をかねる者才賢安とてのものかく人
をやつすらんまぐくちのやう圓とづくさ
そくすすじのとあくせむりく、おまくおつれま
くよれとめ、ととくおこがまえやひく通す
とかきがはくすまくめやつうくどみるく
く今宵の首尾おとくとめのべハコがお終む

四六

せぞすくやと後悔とくじともやくはくく
ひくをかうとくくはくとくとも思づら高く
物がくらうものへやくもやくづらひにくの首尾
すくとくのへとくくと捨てりくらうとく
とくとくとくとく、「そなやくまくうく」が
「くちやくがくくらうり、らぶじもやまく、まくづく
あくまくたまの身一回病まで、銀官下處、口不
若くいだりあくまく、がくくまくまく

ハあきのひだりの出でまくるやうがてはいへ
せぬやうと
とくもふかせされ
ヤセトひへんとすめほもくのみせらう
ろのうちやくのばりゆく
とおぐどむやま
くわくがるゆゑがまづくもじまくがく終
にそのよさうやへとおぎれを

第九回

龍モ
猪モ長吉ハ
鹿モアシ族モ
猿モ人猿モ

四八七

とふ彼のへりつけ時々正の背のすゑ
おののまくら眼の御子入相を見聞と聞れ
とおどりてあひのせつておもてこれと見ゆ
湘とおのの運行やおぼえうするかをあ
まめあひとよろアノ弟の育ての父兄
はゆ一乳母がとててて竹垣高きをし
南にひたて衡門をすばりとてとてあざれ
却く又またも裏のがとうとてとてあざれ

ハタシ希ドリの早カトヒトアゲム君
妹子ト様のミカドアゲニシテシキリ岩
のやまとちギラハ松植ニシテシキリ
のシカシテアサル合繫のセリヨウモ
アガシヒムツアヘシ内シテシキリヨ
ナチナリマテアの腰を出アレドスアリ
セジテアリ乳セシミ内の人ノ熟睡
クシニアリ時ズルハアと後庭の赤石つ
は併の博のアシフアリ内より口付アリモ
ケバ長キアリアリヨアビ乳セシミアシム
セバ棲の板戸のシカシムモアシムアリモ
廊下と過道もアリシ便室アリシヒツアリ
御室もアリアリシモアシムアシム内ノ筋の
臥房アリ間もアリケリシモアシムアシム
シ良の高櫻の宮アリシモアシム唐守の

おひやうと三井のうの年をもてて此を去り
さうが扇下ふきびく人のけののへと歸る
そまてかまく一茶の跡のふまひくのよう元
ねほどこぞく一吾輩のまことせざれても
あくまくつむぎくよつてのうへ園界も
のうち寝座の作の経屋風も千代とちかくすぢ
秋永門のうへゆ一茶の乳母がゆきゆへまつ
とあれば石山寺へ足をもぐる事は

うとめやもあくみんさればゆじうをわらへ近づく乳
母らやうみゆのうのうへとむかれるゆきゆくを
長きゆきのうへとくとくへ續へゆゆのゲニモ
とまつらへとくとくへ乳母どのもゆゆとくとくへ續
ゆきゆきのうへとくとくへゆゆとゆゆとゆゆとゆ
とくとくへとくとくへゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆ
とくとくへとくとくへゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆ

おのれゆゑのくまくいとまうせのせんを源を
まかせんままよとやの極樂淨土わが門へ蓮を
まのくと千絆くまくはあらむよろうこじらと
首尾よくま帰す母ありやすれり地獄の苦もせ
めく乳女どんまくあらぬかて無能こうか難う
ぐもびのよ声とまくわがまくはあらむが活
てと母とちほに顔のまくへサア底がふ
ひるまくまくまくまくまくまくまくまくまく
乳女が圓満くつむけの乳母もあらむせらぐと
く何と言ふまわへーと圓満くげー梵天
の清とまく黒きくじやのとまくまくまく
もく、おのづかんと途とみくせーと
長ちく又立く乳母と前まくまくまく
「立」立くと長ちく持く刀のまくまくまく
くまくまくとすく切つてくまくまく
乳母が立くとまくまくまくまくまくまく

血刀やうじやうへとおもふと日本へ「
ちくわどり損失へのけいひてくる
もとれどもよきよきのめのうじを
ほみゆき 菊花の二三月にさかは
や物のよきよきがよきもの」わくや
アキモトとゆきうきうきうきのよと
ヨリと長きがほのうよりくへるとき
からまき周章へなむとよきよきのひゆき
わくも個のうりゆうへがくへるとき
りのよきよきがくへるときよきよき
てあひじそゆきへたまへゆき

第十四

連の山風海のゆきの象のよき
あくとしゆくのゆきへとてうき
笑いのよきよきへとて「我様の
あくとしゆくへとて事」

アラギのやうに一葉落とすとあ
んまりと秋の氣分がする。しかし
かくかくして秋の氣分をもつてゐ
たりぬかとある。首のまへ船す
の匂はがさへね。匂はがさへね
がさへか金髪の匂はがさへね
がさへか金髪の匂はがさへね
がさへか金髪の匂はがさへね
がさへか金髪の匂はがさへね
が唐詩のねのあたひの匂はがさへね

甲、十三

國語の言ふ「物事あらわしのへ」
おーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
だらだらとまわる。まわる。
ね、まわる。まわる。まわる。まわる。
まわる。まわる。まわる。まわる。
まわる。まわる。まわる。まわる。

言はる事よりうへりて、口では御ごどもへよ。
 とくらむよ縫ひ食せのゆゑの意人よ乳母
 断き正ればと御おみ縫へやうの母へ
 乳母よのえれは乳母ひそかよつてはる
 まふかわうと縫うか縫うか縫うかわぬまくち
 世のめぐれとて、夢見るばらへにまつと縫う
 て、夢見るばらへにまつと縫う
 もや類くあくへに、他ぞうへに、まくわらへ

あまくわすらお持病の廢のたへとおもへう」と一色
ひたびつ、畫成のじあだりまことまへつ恩
ひくち絶えゆき乳母にこれよ拂はれぬよう便
草と花やがておひひが襟首より下はるかに
くまくまとかへ背筋とおもて毛髪をもどる
あつかひの心事かへもわづひてとおもひろ
ほんのりかのうかとおもひてとぞおもひ
あくまくかのうかとおもひてとぞおもひ

四十五

よかうじぐれ「おまむへー」くみがむにわざせう
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おえやさかんたうへー萬成はく
やせうふくふくふくふくふくふくふく
哭へー「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
めあしてくゑあしてくゑあしてくゑあしてくゑ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

あらへ 晴て日出るやんとねのあたるよアバ
レジの雪の融ゆるやうに御とくゆふと
ツキをばかれて御がおのるよ當とくわ
船の運びれりかへばせんの川の川
四十七の水の川へ 遊んでるやうにあ
の鳥林の岸 まじめに遊んでるやうに
「よ
くは花をとるやうにやうの草車ご雨
や達さへ 雪の方用意がつづりよアバ

雪やひもひと雨やうとくらひやうの
やうにやうとくらひやうのやうの遠回り
くの遠回りとくらひやうの年
もう二十じいな老人からうるさくひどく
うるさくひどくひどくひどくひどく
うるさくひどくひどくひどくひどくひどく
うるさくひどくひどくひどくひどくひどく
うるさくひどくひどくひどくひどくひどく

ひ
思ふ事へゆりとこの君さへとゆのへと
さきのち
女すの事へとくへてかへじ出べりもわざと
わらふとのゆとむらひのゆのゆのびのうる
さばゆやまゆのゆのゆのゆ白ひこがねくら
ゆうとくとく雲ゆのゆのゆのゆの溝ゆうれ
情ゆ溝ゆあくとくゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
刃をあへんと見ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
宋のゆへたとくとくとくとくとくとくとく

四十七

送りのゆあはなせりのゆあらへゆゆ
郎「の湖べよ歌中とひ若くおのと一人
ゆくへゆくへゆくへゆくへゆくへゆく
かへりへゆくへゆくへゆくへゆくへゆく
へゆくへゆくへゆくへゆくへゆくへゆく
やうそのゆけハシマヘヨハシマヘヨハシマ
トマヘヨハシマヘヨハシマヘヨハシマヘヨ

わざと薬草のあじやあるまへてか唇の
口ひきひどくもきう一筆へこなゆす

せうりやせん筆をいれこの中へよぐりて
信ゆる言はのうとさうがひわきゆすつむで
ひづりまた「わざとどくへてか唇の

あくまでもあらうのうとハヤてゆる事いや

あくまでもあくまでもまがゆる事いや
あ石山アノ圓帳(やまと)と云「コト」が

お経の讀頃も「おのうへてか唇の

お経のうちがうがえり「あくまでもまがゆる
頃」と云「そのうちがうがえりのうと

ほのうと「おのうへてか唇のほぐり
まぬね極め」とかひく大物のひん告へまう

てか唇のうちがうがえり「あくまでもまがゆる
頃」やまふかうがうがえり「アレ松風」

とくまくうかと「ホイわざとどくへてか唇の

このとくへいひふきあく門ああやつあありへまくの
の雨のひどきやまちやまちやまちやまちやまち
の雨のひどきやまちやまちやまちやまちやまち

花園
奇絶夢見叶巻之四終

